

回想文

釘貫亨教授退職記念号に寄せて

増 本 理 絵

修士課程を修了し、日本語学とは無縁の業種に就職してから十年以上が経過した身であるが、この度、釘貫亨先生の退職記念号の回想文を書く機会を頂戴した。他にも適任の方が多々おられた中、この機会をくださった皆様のお心遣いに感謝申し上げたい。

文学部一年生の時に、文学部の各専攻の先生方が毎週入れ替わりで専攻内容を紹介するという授業があり、そこで初めて釘貫先生の講義を受けた。当時学部生であった私は、九十分の授業だけでは十分に理解しきれなかった点もあったが、そこでレジュメとして配布された釘貫先生の論文（確か奈良時代語の完了辞の論文であったと思うが、その後もかなりの数釘貫先生の授業を受講したため、記憶が錯誤しているかもしれない）の論の分かりやすさや根拠の示し方などに大きな感銘を受け、日本語専攻に進むことを決心した。ちなみにそのレジュメは、日本語学の勉強のためだけでなく、様々な授業で

レポートを作成する際の手本として幾度となく読み返したものである。

日本語専攻に進み、釘貫先生の授業を数多く受講したが、釘貫先生は常におおらかな態度で学生に接してくださった。学生の研究発表についても、例えば考えが未熟であったり、あるいは進みが遅かったりといった点があったとしても、決して否定的なことは言わず、必ず次に進むための助言をくださった。

そのため、釘貫先生の授業はいつも和気藹々としていた。釘貫先生の演習は、発表当番の学生が資料を準備し、それをもとに釘貫先生や学生が思い思いに意見交換を進めるというスタイルだったが、その中で披露される先生と学生とのやりとりが面白く、本当に大好きな授業だった。私自身は授業中あまり発言しない学生であったが（申し訳ない）、授業後も演習内で議論された内容について研究室の先輩方とざっくばらんに話すことも珍しくな

く、それを含めて演習を楽しんでいた。釘貫先生のおおらかさの影響か、日本語専攻の研究室は包容性のある雰囲気を持ち、勉強不足の感がある後輩（私のことである）も含め、先輩後輩を越えてそれぞれの意見を交えることができる雰囲気があった。

釘貫先生は、仕事の合間の息抜きであろうか、教授室を出てふらりと研究室に顔を出しては、学生相手ににぎやかに雑談を交わしてくださることも多かった。雑談のテーマは多岐にわたっていたが、特に筋トレの効能について幾度となく力説されていた姿を今でも思い出す。一方、日本語学に関する話をされることはあまりなく、逆に、例えば学生同士で研究の話をしている最中に顔を出された時には、あまり長居はされず、すっと教授室に戻られた。学生同士の意見交換の機会を邪魔しまいと氣を使われていたご様子だった。

もちろん、ごく稀にはあるが、雑談の中で日本語学のお話をしてくださることもあった。ある日、学生数名を含めた雑談の最中、私の地元の方言が話題となり、「その法則からすると、Aという言い方とBという言い方の両方の可能性がありそうだが、方言話者からするとAという言い方がしっくりくる」という議論が始まった。しかし、その「しっくりくる」理由が何なのか、方言話

者であった私も十分に説明ができない。と、幾分話が停滞してしまったところ、釘貫先生がさっとホワイトボードで解説を書き始めたのである。ホワイトボードを背に、さらっと簡潔な説明を示された姿は鮮烈に印象に残っており、研究室の雑談の記憶として真っ先に思い出すエピソードである。

学生指導においても、釘貫先生は普段は細々したことはおっしゃらず、おおらかに見守る態度を取られていたが、場面場面で様々な心配りをくださっていた。私の場合、「日本語学をもう少し勉強したい」という気持ちだけで修士課程に進んだものの、当初より研究職には向いていないことを自覚しており、修士一年時から就職活動と修士論文の作成を並行していた。修士論文の進捗状況や修士課程後の進路について、釘貫先生もやきもきされることが多々あったかと思うが、進捗を督促されるような言葉や態度を示された記憶は一切ない。一方で、（今振り返って改めて気づくばかりであるが）研究職としての道の糧になるような機会を、就職活動を行っていた私に対してもさりげなく与えていただき、将来の選択肢の幅を広げられるような支援をくださっていた。結局日本語学とは全く関係のない業種に就職することになってしまい、ご配慮を無にするような結果となってしまった

が、釘貫先生は私の進路が決まった後も、「社会人学生としての道もあるから」と負担にならぬように声掛けをくださった。見えないところで関係部署への調整をしてくださったものもあつたはずで、ひょっとしたらどこかで釘貫先生の顔を潰すことになってしまったのではないかと、思い返しても本当に申し訳なく感じている。

修士課程を終えた後も、数年ほどはご厚意に甘え研究会などに出入りさせていたのだが、仕事の都合で数年ほど県外へ転勤したのを期に日本語学からは完全に遠ざかってしまった。そのため、私の力量では肝心の釘貫先生のご研究について触れることができず心苦しい限りであるが、本稿にて、元学生から見た釘貫先生のお人柄が少しでも伝われば幸甚である。